

## Y B2-4

### 北イラクにおける戦傷外科研修の報告

#### 熊本赤十字病院

○岡村 直樹、高村 政志、宮田 昭、  
鈴木 隆雄、曾篠 恭裕

ICRC（国際赤十字委員会）での活動として戦傷外科領域の知識・技術が必要であるが、現在の研修制度では戦傷外科に関して研修することは困難で、また ICRC 戦傷外科病院が当事国の医療者により運営されることが多いため、国際的にもその機会は少なくなっている。イラク共和国北部のクルド地域は周辺の小規模の戦闘などによる爆破創、銃創による負傷者が運ばれてくる地域にある。熊本赤十字病院ではこの地域での実地研修を開始し、戦傷外科等の関連知識、技術の修得を計ることを目的とした研修を約1ヶ月間受けてきたので報告する。期間 11月26日～12月25日場所 イラク共和国北部クルド地方政府管轄地域 スレーマニア教育病院 症例数 1) 手術参加（含む見学）：41例 内訳は戦傷外科関連 13例：爆破創/銃創による腹部損傷5例、胸部損傷2例、デブリードマン等の整形外科症例6例。非戦傷外科疾患：急性虫垂炎、穿孔性腹膜炎による試験開腹。2) 緊急手術にはならなかったが、救急外来で経験した戦傷外科関連症例：12例 内訳は全て爆破創による異物遺残の症例。Debridement だけで経過観察となっていた症例である。

## Y B2-5

### ケニアでの緊急医療対応ワークショップ開催報告

#### 名古屋第二赤十字病院

○花井 美和、伊藤 明子、白子 順子、  
赤塚 あさ子、石川 清

ケニア大統領選挙後の暴動により、ケニアの各医療機関では多数の負傷者を一度に受け入れる経験をした。赤十字国際委員会（ICRC）は暴動直後から、外科チーム（FST）を派遣し犠牲者の救援活動を行った。暴動は沈静しつつあったが、ケニア保健省は ICRC に、病院対応と救急医療の指導を依頼した。演者らは FST 第 2 班として派遣され、他のメンバーとともに大規模災害時の緊急医療対応ワークショップを開催した。ワークショップは ICRC の FST（外科医 1 名、麻酔科医 1 名、看護師 2 名）を講師とし、ケニア国内の 4 つの州で各々 2 日間行った。参加者は地域の公立病院から 2-3 名ずつ、各開催地 20 人前後であった。1 日目は ICRC の紹介、救急処置の ABC 及び生理学的・解剖学的評価と対応、トリアージの基礎の講義を、2 日目には大規模災害時における病院での負傷者受入れの講義後、グループに分かれ、多数の負傷者が発生した場合を想定したトリアージの机上訓練を行った。また最後に ICRC の戦傷外科治療基準に基づいた外科処置・治療や麻酔の講義を行った。参加者からは、経験の少なかった銃や槍による外傷の治療・処置やトリアージのエリア設定等について、多くの質問があった。また警察との連携、各病院・診療所との連携についても、活発な意見交換が行われた。参加者は意欲的で、ワークショップで学んだことを病院ですぐ実行する、フォローアップに病院を訪問してほしい、開催回数を増やしより多くの人に参加させたい、などの意見があった。演者は、国際救援の派遣及びワークショップ開催は初めての経験であったが、大規模災害における緊急医療対応について学ぶ良い機会となった。多数の負傷者を受け入れる対応は、基本的には日本国内と同様であり、日頃の国内での災害救護、訓練および教育が必要であると考えた。